

『空の色』『空色』について

——『源氏物語』の消息文の料紙の研究——

坪井 暢子

『源氏物語』では数多くの消息文が書かれ、そこで用いられる料紙の種類や色は重要な意味を持つ。料紙の色が示されるのは四十例であり、その内訳は次のとおりである。

白十三例、紫七例、紅・赤三例、緑・浅緑四例、青鈍三例、
縹二例、胡桃一例、青一例、青摺一例、紅梅襲一例、鈍一例、
黒一例、空色・空の色二例

今回は特に、その中で「空の色」「空色」の料紙に注目をしたい。なぜならばこれらの色が『源氏物語』以外の同時代の作品においては見られない色であり、どんな色なのか判断としないものだからである。一体「空の色」「空色」とはどんな色なのだろうか。

(一)

まず物語中での「空の色」「空色」の用例を挙げてみよう。

一つは「空の色したる唐の紙」である。葵巻で、葵上を亡くした源氏が、朝顔宮に消息文を送る場面で用いられた。「時雨うちして、ものあはれなる暮れつかた」のこと、いつもつれない朝顔

宮に、「今日のあはれはざりとも見知り給ふらむ」と推量し、もうすっかり暮れていたけれど次のような文を送った。

わきてこのくれこそ袖は露けけれ物思ふ秋はあまたへぬれど

いつも時雨は。(二一〇三)⁽¹⁾

「時雨は毎年のことだが、そして物思うのは秋の常だが、とりわけ今日のこの時雨はひとしお涙を誘う」と心中を述べたものである。このとき用いられた「空の色したる唐の紙」については、各注釈書では次のように解釈している。

まず古注⁽²⁾では「花鳥余情」には「服者の用る色」、「孟津抄」

に「服者の色の紙なり」とあり、「河海抄」「源氏和秘抄」「細流抄」「明星抄」「岷江入楚」「湖月抄」はすべて「鈍色」としている。

現代の注釈書では大系、全集は「空色」とし、全書は「時雨の空の色、鈍色」、集成は「今の空の色、薄墨色」、新大系は「時雨の空を思わせる薄墨色」という解釈をしている。また新全集では「空色」としながらも頭注には「時雨の空の緑による料紙」と述

べる。

もう一つの例は濤標巻で、六条御息所が亡くなり、源氏が齋宮に弔問の文を送った場面である。「雪、寒かき乱れ荒るる日」のことである。

ただいまの空を、いかに御覧すらむ。

降り乱れひまなき空に亡き人の天翔けるらむ宿ぞ悲しき

【空色の紙の、くもらはしきに書いたまへり。(三・44-45)

とある。「空色の紙の、くもらはしき」については、葵巻の「空の色」と同様、曇った空の色、つまり鈍色、この時の空模様の色と解釈する注釈書と、「空色」を「薄い縹色」「浅みどり」とする注釈書がある。

具体的に示すと、古注においては『河海抄』『孟津抄』が「薄縹」と述べ、「岷江入楚」がこれを踏襲する。一方『細流抄』『明星抄』『湖月抄』は「くもらはしきとはにび色のこころなり」と述べ、「空色」については直接言及していない。また『花鳥余情』は注釈を載せない。『河海抄』『岷江入楚』が「空の色」については「鈍色」としながら「空色」について「薄縹」と述べるのは、「空色」を「空の色」と区別し、現在と同じような「晴れた空の色」を示す色彩語としてとらえているからであろう。

また現代の注では全書は「曇った空の色。にび色」、評釈が「薄墨色」とするが、大系は、

地は空色即ち浅みどり(薄い藍色)の紙で(の)、それに薄

墨を引いて薄黒い様にしてあるものに。先方が喪中であるから、空色に鈍色(薄墨色)を掛けて黒ずませたのである。「曇った空の色」即ち只の鈍色ではない。

とする。全集は「空色のくもったようなのに」と口語訳し、頭注で「くもらはしき」とは鈍色を重ねた色調をいう」と述べ、新全集もほぼ同じである。また集成は「薄い縹色(薄い藍色)の紙の黒ずんだのに」としている。また新大系は「日本色名大鑑」⁽⁴⁾を引き、「浅黄(水色)よりやや濃い藍色」とするが、「喪中に空色を用いること、葵巻にも見える」と述べる。

つまり、全書は「空の色」「空色」ともに、「そのときの空の色、すなわち鈍色」と解釈し、大系、全集、新全集は「空の色」「空色」ともに現在言うところの「空色」すなわち「浅緑」「薄い藍色」のような色調と見、集成、新大系は「空の色」は「そのときの空の色、つまり薄墨色」「空色」は現在言うところの「そらいろ」と解釈しているようだ。

ただし新全集では「空色」といいながらも「時雨の空の縁」と述べてみたり、新大系でも一方を「薄墨色」、他方を「浅黄より濃い藍色」といいながら、「喪中に空色を用いること、葵巻に見える」と述べ、両者を同じと見なしている風にとれ、曖昧さが残る。

これらの注釈から、「空の色」と「空色」は同じなのか違うのか、つまり、「空色」という色が、「そのときの空の色」という意味で

はなく色彩用語として当時認知されていたかどうかという点と、「空の色」「空色」とは実際にはどういう色なのかという点が問題点として挙げられる。

まず当時、「空色」が特定の色彩を示す色彩語として認知されていたかどうかという点に付いては疑問が残る。というのも「空色」もしくは「空の色」が特定の色彩を示す語であったというような例が見られないからである。

例えば『日本国語大辞典』⁽⁵⁾においては「空色」を「晴れた空の色。うすい藍色」として、『源氏物語』の漆標の例を挙げる。確かに当時、空を「浅緑」「縹」と示したものはある。たとえば『源氏物語』においても梅枝巻で「花さかり過ぎて、浅緑なる空うららかなるに」(四・266-267)という例がある。また『和泉式部統集』⁽⁶⁾に、つとめてはしのかたをながむれば、空いとうようはれて、かりのつらねてなきわたるを

とふかとしてみどりのかみにひまもなくかきつらねたる雁がねをきく

『大齋院御集』⁽⁷⁾に、

かへるさぞあはれなりけるかりがねはみどりのかみにかけるたまつさ

という例など、空ゆく雁を「みどり」の色紙に書き連ねた文字と見立てる和歌がある。

また空の色を「縹」と示すのは、平安末頃からで、早い例とし

ては「永縁奈良良房歌合」⁽⁸⁾の

あきのよのふけゆくかせにくもはれてはなだのそらにすめる
つきかな

がある。しかし晴れた空の色を「みどり」と表現することがあったとしても、「空色」≡「みどり」ということにはならない。

空の色は変化するものであり、「浅緑」「縹」以外の色が示される場合もある。また「空の色」「空色」という言い方自体、『源氏物語』が書かれた時代までの作品にはあまり見られず、むしろ「空のけしき」という用例が物語中にかなり多く見られることから分かるように、空は色彩そのものというより、空模様が問題にされることが多く、現在のように「空色」といえば、特定の色彩(薄い青色)を思い浮かべられているとは思えないのである。

「空色」が一つの色彩用語として示された早い例としては、『助無智秘抄』⁽⁹⁾(永万二年、一一六六年ごろ成立か)に

先例ヲ尋ヌルニ。但アラニビノ表袴ヲキテハ。心喪ノ人ニカ
ギラス。ソラノイロト号シテトキドキキル也。(122頁)

と述べてある。これに従えば「空色」は背鈍と同様の色を示す色彩用語として用いられていたと考えられる。しかしながら、ここでの例は、背鈍を心喪の時以外に着るために、あえて用いた語であり、隠語に近いとも言え、一般に用いられた語とは言えない。

また、西行の『山家集』⁽¹⁰⁾上、秋に「霧上雁」と題し、
空色のこなたをうらにたつきりのおもてにかりのかかるたま

つさ

という歌がある。これは「空色」がどんな色かは明らかにされないが、霧のたつ空を色紙に、飛ぶ雁を毛筆の書面に見立てていることから、「空色」が、一つの色彩用語として認識された例と言える。しかしこの「空色」がどのような色なのかは不明であり、言えることはこの例が、「空色」すなわち「空の色」を「空のけしき」ではなく、一つの色彩として認めたもっとも早い例の一つということのみである。

このほか辞書類に「そらいろ」が項目として現れるのは『書言字考節用集』であり、色の説明がなされているものとしては『日葡辞書』⁽¹¹⁾に「sorairo 水色」とあるのが、早い例である。

したがって、『源氏物語』における「空色のくもらはしき」の「空色」をあえて暗れた空の色つまり「浅緑」、「薄い藍色」などと解釈する根拠はない。すなわち「空色」「空の色」ともに、「そのときの空の色」を指すものであり、『源氏物語』の二例においてはいずれも、「時雨のころの」「暮れ方」の空の色、「雪、霰の降る荒れた空」の色であるとした注釈が妥当である。

では「そのときの空の色」は何色であったと見るのがよいだろうか。

葵巻では時雨降る夕暮れ時、潘標巻では雪や霰のかき乱れる荒れ模様の空である。そのような空模様を表現したものをいくつか挙げてみよう。

『枕草子』⁽¹²⁾一〇六段に

二月つごもり頃に、風いたう吹きて空いみじうくるきに、雪すこしうち散りたる程（165頁）

一四四段に、

正月十よ日のほど、空いと黒う、雲もあつく見えながら、さすがに日はけざやかにさし出でたるに（203頁）

という例があり、荒れ模様の雲厚い空を「黒」と表現した例がある。

「黒き紙」は、椎本巻で八宮が亡くなった時の勾当からの弔問の文に対する大君の返事に用いられ、「黒き紙に、夜の墨つきもたどたどしければ」（六・328）という例が見える。

また明石巻には暴風時の空の様子を「空は墨をすりたるやうにて、日も暮れにけり」（二・203）と述べる。

また『蜻蛉日記』⁽¹³⁾には、

遠山をながめやれば、紺背を塗りたることやいふやうにて「霰ふるらし」ともみえたり。（250頁）

という例、『紫式部日記』⁽¹⁴⁾には時雨がさつとかきくらし降る日に交わされた消息文の料紙として「いたうかすめたる濃染紙」（467頁）が用いられた例が見られる。濃染紙とは濃い紫の料紙である。

以上の事から、このときの空の色としては、「黒」といわれる色、もしくは濃い藍色や濃い紫が考えられる。

また「空の色」「空色」の料紙が用いられたのが、いずれも服

喪者に関わるものであることをあわせて考えてみよう。物語中、弔慰を表す消息文には「鈍色」「濃き青鈍」「紫のにはめる」「黒」などが、用いられている。これらの色合いと先に挙げた「そのときの空の色」の色合いとを比べてみると、ほぼ同じ色と推測でき、したがって、「空色」「空の色」は「鈍色」あるいは「にばめる色」とするのが妥当と思われる。

「鈍色」は「源氏物語」のみならず、服喪者の衣装や、弔問の消息文などに用いられ、主に服喪の場面で用いられる。色彩としては「薄黒い色」(源氏物語事典)¹⁵⁾と捉えられている。しかし「鈍色」が実際にはどういう色か、というと実はこれも単純にはいえない。というのもその色については「花田染め」、「蘇芳にドウサを入れる」、「青花に黒を入れる」など、実に多様な解釈があり、はつきりとは分かっていないからだ。しかし時雨がちな夕暮れや、荒れ模様の曇天の空の色にたとえられる色であることや、物語中、喪服が「椽(つるばみ)」と表現される例もある(母御息所の喪に服する落葉宮の喪服)ことから、「薄黒い」色であることに間違いないであろう。

ちなみに衣装に関して言えば、服喪者の用いる衣装の色は大半「鈍色」「薄鈍」「濃き鈍色」、あるいは「黒」であるが、「青鈍」は必ずしも服喪者の用いるものではない。服喪者に関わる色としては、衣装の場合よりは、消息文の料紙の方が、規制がゆるやかであり、色のバラエティが認められるといえるだろう。

「鈍色」は喪服や、法衣、服喪中の調度、消息文に用いられた例が見られるほかに、薄雲巻に、

夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄く渡るが、鈍色なるを、何ごとも御目とまらぬころなれど、いとものはれにおほさる。(三二六)

という例や、柏木巻に、

夕暮れの雲のけしき、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とどめたまふ。(五三十一)

という例があり、「雲」を「鈍色」とした例がある。

しかし鈍色の用い方としては、喪服や調度に用いる以外、通常自然の事象に用いることはなく、これらの例は「鈍色」の用い方としては特殊な例と言える。しかしここで「雲」を「鈍色」としているのは、薄雲巻の例は藤壺の死により悲しみに暮れる源氏の見た「雲」であり、柏木巻の例は柏木を亡くし、悲しむ致仕大臣や夕霧らが唱和をする、その時に人々が見た「雲」であり、いずれも人々の哀悼の気持ちに呼応した表現となっているからであろう。つまり本来「雲」ならば、「黒し」とでも表現するべきところを、あえて「鈍色」と表現することで、雲までもが人々の悲しみを理解しているかのように見える、ということを表しているのだろう。

(二)

では次になぜ「空の色」「空色」という言い方がなされたのか、考えてみたいと思う。というのも弔慰を示す消息文であるならば、「鈍」でも「にばめる」色とても表現すればいいはずで、あえて色彩用語ではない「空の色」「空色」という言い方をすることには何らかの意味がありはしないかと思うからである。

先にも述べたように『源氏物語』において、消息文の料紙の色が示されるのは四十例である。これらの料紙がどのようにして選ばれているかという、消息文の中に書かれた和歌の内容に従い、文付枝が選ばれ、それと同系色の料紙が選ばれるというケースが多い。

また文付枝が示されない場合でも、例えば盤黒大將が、雪の朝に、玉鬘に白い薄様に文を書き贈った場合などは、雪という気象に関わる和歌との関連から選ばれたものと思われる。

「空の色」「空色」は「鈍色」または「にばめる色」であると先に述べたが、「鈍色」は服喪者からの消息文、または弔問の文などに用いられ、この場合、料紙の色と文付枝との配色は必ずしも同系色にならない。これは服喪者に関わる消息文は「鈍色」、あるいは「にばめる」色というように決められていたからではないかと思われる。

この「鈍色」が「空の色」「空色」と表現された理由は、一つ

には、雪の朝に白い薄様を用いた例と同様、その日の天候と、それに言及した文の内容にあるであろう。そして、それだけ「空」の色」が、この場面で重要であつたということでもあろう。

そこで『源氏物語』における「空」について、少し考えてみたいと思う。

『源氏物語』における「空」の用例はかなり多く見られ、その「空」は「浅みどりなる」「うららかな空もあれば、「うちしぐれたる空」「かすむる空」「霧立つ空」もあり、多様である。先にも述べたように、空は色目が問題にされるよりはむしろ「空のけしき」つまり、空模様、空の気配が問題にされることが多い。そして「空の気色」というものが人の心に少なからず影響を及ぼすものだとわかる場面が多く見られる。それは例えば、

今日ぞ冬立つ日なりけるもしるく、うちしぐれて、空のけしきいとあはれなり。(夕顔・一・179)

というように空の様子にしみじみと情趣を掻き立てられる、という例もあれば、

何心なき空のけしきも、ただ見る人から、艶にもすぐくも見るなりけり。(帚木・一・93)

というように、人の心の状態によつて空の様子も違つて見えてくる、つまり空が人の心をうつしている、といった発想のものもある。また、

日暮れかかるほどに、けしきばかりうちくれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々うつろひ、えならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる、入綬のほど、そぞろ寒く、この世のこととおぼえず。

(紅葉賀・二、15)

あさましくをやみなきころのけしきに、いと空さへ閉づるこちして、ながめやるかたなくむ。

(明石・二、20)

のように、空の様子が、あたかも人々の気持ちを理解しているかのように見える、という表現のものもある。

もちろん「空」のみならず、様々な天象が、人の心に影響を及ぼしたり、自然の事象と人の心を重ね合わせて考える、ということとは「源氏物語」のみに見られる事ではない。しかし「源氏物語」においては、単に天候や季節の移ろいを述べたものよりむしろ、空模様が登場人物の心の風景に重ね合わされた例が多く見られる。では「空の色」「空色」の料紙が用いられた場面においては、空模様と人の心はどのような関係にあるだろうか。

まず葵巻の場合、「時雨」である。時雨の降る夕暮れ、そうはいっても今日の時雨には、つれない朝顔宮もさすがに心を動かされるだろう、と推量したのが、消息文を書く契機となっている。詠まれた和歌は時雨に袖を濡らす、つまり時雨に涙が重ね合わされた発想で詠まれている。また、この消息文を書く前に、頭中将と源氏との間で交わされた和歌の贈答に次のものがある。

「雨となりしぐるる空の浮雲をいつれのかたとわきてながめむ(頭中将)

行方なしや」と、ひとり言のやうなるを、

見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ(源氏)(二、101)

葵を茶毘に付し、立ち上る煙が雲となり、その雲が今日のこの時雨を降らせている。時雨の雲のどれが葵上なのだろうか、もう行方も知れない、という内容である。葵上の葬送の場面で源氏は、のほりぬる煙はそれとわかねどもなべて雲居のあはれなるかな

と詠んでいる。このとき源氏は「大臣の間にくれまどひたまへるを見たまふも、ことわりにいみじければ、空のみながめられたまひて」(二、94)という状態であった。

「空をながめる」という行為は、『古今和歌集』巻十、酒井人真の、

大空は恋しき人のかたまかは物思ふごとにながめらるむという歌が引き歌になっていることが指摘されている。『古今集』の歌では「恋しき人」は「亡き人」というわけではない。「空をながめる」という行為が物思いの行為であり、「どうしてこんなに空ばかり眺めてしまうのだろう、空があの人形見だというわけでもないのに」といった意味である。『古今和歌集』において、「空」と恋が密接に結びついていることはすでに片桐洋一氏によつ

て指摘されているが、同様に、和泉式部の和歌においても「空を眺める」という行為が、恋人を思う姿として、指摘されている。¹⁸⁾このように「空を眺める」という行為は、亡き人というわけではなく、自分の恋する人を感じる物思いの動作として描かれる。源氏物語においてもまた、総角巻において、匂宮が宇治に紅葉狩りに出かけたおり、中君のもとへの中宿りを果たすことができず、嘆き沈んでいる場面でも次のように示される。

人に従ひつつ、心ゆく御ありきに、みづからの御こちは、

胸のみつとふたがりて、空をのみながめたまふに、(七七)

しかし源氏物語「葵」「落標」において「空を眺める」ことは、恋しい人を感じる姿ではなく、亡き人を偲ぶ行為として描かれている。なぜならば、源氏がこの時ながめた空は、亡き葵上が雲となつて漂う空であり、その雲が人々の涙を誘う今日のこの時雨を降らせている。そして空を眺めることは亡き葵上を偲ぶよすがとなつてゐるからである。

落標巻の場合は、葵や萩の降る荒れ模様の中である。六条宮では齋宮がどんなにか寂しく物思ひに沈んでおられるだろうか、と思ひやり、これが見舞い文を書く契機となつてゐる。

「ただ今の空をいかに御覧すらむ」という書き出しからもそのことが伺える。そして和歌に「降り乱れひまなき空に亡き人の天翔けるらむ宿ぞかなしき」とあるように、この萩、葵の降る乱れる空を亡き御息所の魂の「天翔ける」場と捉えている。ここでも空

を眺める事は亡き人を感じる行為なのである。また御息所は、生霊となつて葵上を死に至らしめたとき、よりましの口を通して、次の歌を詠んでいる。

嘆きわび空に乱るるわがたまを結びとどめよしたがひのつま
(一八六)

この歌もまた、落標巻での源氏の歌と同様、空を魂のさまよう空間と捉えていると考えられる。

以上の二例の場合、いずれも空を亡き人の魂の在り処と考え、空を眺める事が亡き人を偲ぶ行為となつてゐる。葵巻の場合、「雲」を介在した「空」であり、落標巻における「亡き人の天翔る空」とは趣を異にすると思われるが、どちらにしても「空」がこのときの源氏の、亡き人を偲ぶ心と密接に結びついていることは確かである。ここで「鈍色」や「にばめる」、黒っぽい色の料紙を用いるのは、当然の事であり、それを「鈍色の料紙」と述べたところで何の不自然も無く、むしろ看過されてしまふであろう。しかしそれを「空の色」「空色」と表現する事によつて、亡き人の魂の在り処である空、その空をより強調する事になつてゐるのではないだろうか。

また、先に挙げた薄雲巻や柏木巻に、夕暮れの空の雲が鈍色であるのを、大切な人を失つた人の目から見れば、自ずと目とどめられるということが書かれていたように、何でもないとときであれば「黒」と表現すればすむ雲の色を、あえて鈍色と表現す

ること、いつもと同じ雲であつてもそれを眺める人の心に添うものとなる。同様に、弔慰を表す文であれば「鈍色」といへばすむものを、あえて「空の色」「空色」と表現することによつて、その時の空が「鈍色」であつて、亡き人を偲び、嘆き悲しむ人々の心をわかっているかのような空の様子なのだ、ということも示している。そのときの空の様子と、それを眺める人々の心が、分かちがたく結びついているのだ、ということも見えてくるのである。

注

- (1) 『源氏物語』の本文の引用は、日本古典集成『源氏物語』一―八(石田稔二・清水好子校注 新潮社 昭和51―60年)により、巻数を漢数字で、頁数を算用数字で示す。また『集成』と略す。
(2) 古注については、次の本文に依つた。

玉上琢彌編・山本利達・石田稔二校訂『紫明抄 河海抄』(角川書店 昭和43年)
中野幸一編『花鳥余情 源氏和秘抄 源氏物語不審条々 源氏秘話 口伝抄』(武蔵野書院 昭和53年)
伊井春樹編『内閣文庫本細流抄』(桜楓社 昭和55年)
中野幸一編『明星抄 雨夜談抄 種玉編次抄』(武蔵野書院 昭和55年)
中野幸一編『岷江入楚』一、二(武蔵野書院 昭和59、61年)
野村精一編『孟津抄』上(桜楓社 昭和55年)

北村季吟／有川武彦校訂『源氏物語湖月抄』上・中・下(講談社学術文庫 昭和57年)

- (3) 現代の注は次のものにより、それぞれ略称で示す。

全書……池田亀鑑校注『源氏物語』一―七(朝日新聞社 昭和21―30年)
大系……山岸徳平校注『源氏物語』一―五(岩波書店 昭和33―38年)
評釈……玉上琢彌『源氏物語評釈』一―十二(角川書店 昭和39―43年)
全集……阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』一―六(小学館 昭和45―51年)
新大系……柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西裕一郎校注『源氏物語』一―五(岩波書店 一九九三―一九九七年)
新全集……阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』一―六(小学館 一九九四―一九九八年)
(4) 『日本色名大鑑』は上村六郎・山崎勝弘著 甲文社刊 昭和25年。
(5) 『日本国語大辞典』(小学館 昭和47―51年)
(6) 『和泉式部統集』の引用は『新編国歌大観』第三卷(角川書店 昭和60年)による。
(7) 『大齋院御集』は『私家集大成 中古Ⅱ』(和歌史研究会編 明治書院 昭和50年)による。
(8) 『新編国歌大観』第五卷(角川書店 平成2年)による。
(9) 『助無智秘抄』は『群書類從』第八輯(堀保己一編 続群書類従完成会 平成3年)による。

(10) 『山家集』は『私家集大成 中世Ⅰ』(和歌史研究会編 明治書院 昭和49年)による。

(11) 『日葡辞書』は土井忠生・森田武・長南実編訳『日葡辞書』(岩波書店 一九八〇年)による。

(12) (13) (14) 『枕草子』『蜻蛉日記』『紫式部日記』の本文の引用は、次のものによる。

池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔校注『枕草子・紫式部日記』(岩波書店 昭和33年)

鈴木知太郎・川口久雄・遠藤嘉基・西下経一『土左日記 かげろふ日記・和泉式部日記・更級日記』(岩波書店 昭和32年)

(15) (16) 池田亀鑑『合本 源氏物語事典』(東京堂出版 昭和62年)。

(17) 『古今和歌集』の引用は『新編国歌大観』 第一巻(角川書店 昭和58年)による。

(18) 『古今和歌集全評釈』(片桐洋一 講談社 一九九八年)に「恋の歌と空を眺める動作とは深く関わっている」という指摘がある。

(19) 佐伯梅友・村上治・小松登美著『和泉式部集全釈』(東宝書房 昭和34年)に、「つれづれと空を見らるる思ふ人天降り来むものならなくに」について次のように述べる。

敦道親王かその他亡き恋人への追憶歌ではないかと与謝野夫人は見てをられるが、この時代の人々の感じ方としては、亡き人は、むしろ朝の雲や煙、山の霞等に感じるのが常であつて、空をつくづくと見るのは……かひもない恋に思ひ乱れた果てのわざと感じられていたやうである。

このほか次の文献を参照した。
前田千寸『むらさきくさ』(河出書房 昭和31年)

伊原昭『日本文学色彩用語集成—中古—』(笠間書院 昭和52年) (つばい のぶ) 玉野市立玉野商業高等学校教諭

研究室受贈図書雑誌目録Ⅱ

岡山大学国語研究(岡山大学教育学部国語研究会) 十五

学習院大学国語国文学會誌(学習院大学国語国文学會) 四四

学大国文(大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座) 四四

香椎鴻(福岡女子大学国文学会) 四六

活水日文(活水学院日本文学会) 四十、四

活水論文集 日本文学科編(活水女子大学・短期大学) 四四

金沢大学国語国文(金沢大学国語国文学会) 二六

河南論集(大阪芸術大学芸術学部文芸学科研究室) 六

かほよとり(武庫川女子大学大学院文学研究科) 九

上林曉研究(園田学園女子大学 吉村研究室) 九

岐阜女子大学 紀要(岐阜女子大学) 三十

岐阜大学国語国文学(岐阜大学教育学部国語教育講座) 二八

九州大谷情報文化(九州大谷短期大学情報文化学会) 二九

紀要(信州大学医療技術短期大学部) 二六

紀要(中央大学文学部) 一八四、一八五

境界と日本文学 国際日本文学研究集會會議録(国文学研究資料館) 一三、一四